

『三国志』公孫瓚伝 改行&スぺース挿入&適宜省略をしました版

作成…ひろお

袁術が漢臣でいらなくなり、のちに皇帝即位まで走ったキツカケは、公孫瓚が作った。これを言います。また袁紹は、劉虞を皇帝にすることに、積極的ではなかった。これも言います。

■ 1節 美声と胡族殺しで、世に出る

公孫瓚 字伯珪，遼西令支人也。為郡門下書佐。

有姿儀，大音聲，侯太守器之，以女妻焉，遣詣涿郡盧植讀經。

○典略曰…瓚性辯慧，每白事不肯稍入，常總說數曹事，無有忘誤，太守奇其才。

後復為郡吏。劉太守坐事徵詣廷尉，瓚為禦車，身執徒養。

劉太守とは、劉基らしい。劉繇の兄弟じゃないよね要確認。

及劉徙日南，瓚具米肉，於北芒上祭先人，舉觴祝曰…

「昔為人子，今為人臣，當詣日南。日南瘴氣，或恐不還，與先人辭於此。」

再拜慷慨而起，時見者莫不歔歔。劉道得赦還。

恩人に報いた、美談。日南まで、お供します、と先祖を祭った。それだけ。

瓚以孝廉為郎，除遼東屬國長史。嘗從數十騎出行塞，見鮮卑數百騎，

瓚乃退入空亭中，約其從騎曰…「今不沖之，則死盡矣。」

鮮卑との初対決。ちくま訳…いまこれを突き破らねば、ひとり残らず殺されてしまうぞ。

瓚乃自持矛，兩頭施刃，馳出刺胡，殺傷數十人，亦亡其從騎半，遂得免。

鮮卑懲艾，後不敢復入塞。遷為涿令。

光和中，涼州賊起，發幽州突騎三千人，假瓚都督行事傳，使將之。

軍到薊中，漁陽張純誘遼西烏丸丘力居等叛，劫略薊中，自號將軍，

略吏民攻右北平，遼西屬國諸城，所至殘破。

○九州春秋曰…純自號彌天將軍，安定王。

瓚將所領，追討純等有功，遷騎都尉。屬國烏丸貪至王率種人詣瓚降。遷中郎將，封都亭侯，進屯屬國，與胡相攻擊五六年。丘力居等鈔略青、徐、幽、冀，四州被其害，瓚不能禦。

この4州は、のちに袁紹が領土とする。胡族が荒らした地を、袁紹と公孫瓚が取り合ったのだ。

■ 2節 胡族政策が正反対、劉虞の赴任

朝議以宗正東海劉伯安既有德義，昔為幽州刺史，恩信流著，戎狄附之，若使鎮撫，可不勞衆而定，乃以劉虞為幽州牧。

劉虞である。胡族を、懐柔するための人事だ。

○吳書曰…虞，東海恭王之後也。遭世衰亂，又與時主疏遠，仕縣為戶曹吏。

皇族としては、傍流だ。

以能治身奉職，召為郡吏，以孝廉為郎，累遷至幽州刺史，轉甘陵相，甚得東土戎狄之心。後以疾歸家，常降身隱約。

異民族を手なずけたあと、退職したのは、病気のせいだった。つぎは、故郷で慕われた話。

與邑黨州閭同樂共恤，等齊有無，不以名位自殊，鄉曲咸共宗之。

時鄉曲有所訴訟，不以詣吏，自投虞平之。虞以情理為之論判，皆大小敬從，不以為恨。嘗有失牛者，骨體毛色，與虞牛相似，因以為是，虞便推與之。

後主自得本牛，乃還謝罪。

牛は重要な財産だったようだ。裁判沙汰が多い。曹操の曾祖父も、牛で同じ話がある。

會甘陵復亂，吏民思虞治行，復以為甘陵相，甘陵大治。

徵拜尚書令、光祿勳，以公族有禮，更為宗正。

○英雄記曰…虞為博平令，治正推平，高尚純樸，境内無盜賊，災害不生。

時鄰縣接壤，蝗蟲為害，至博平界，飛過不入。

劉虞の治世がすばらしいから、イナゴが侵入しなかった。劉虞の名声がわかる。

○魏書曰… 虞在幽州，清靜儉約，以禮義化民。靈帝時，南宮災，吏遷補州郡者，皆責助**治宮錢**，或一千萬，或二千萬，富者以私財辦，或發民錢以備之，貧而清慎者，無以充調，或至**自殺**。靈帝以虞清貧，特不使出錢。

靈帝は、宮殿の修理費を出させた。劉虞だけは、支払いが免除された。

虞到，遣使至胡中，告以利害，責使送**純首**。**丘力居**等聞虞至，喜，各遣譯自歸。

河北4州を荒らした、つよい丘力居。劉虞に帰順した。公孫瓚は、台無しにするため、胡族を殺す。

瓚害虞有功，乃陰使人**徼殺胡使**。胡知其情，間行詣虞。

虞上罷諸屯兵，但留瓚將步騎萬人屯**右北平**。

公孫瓚をのぞき、武装解除されてしまった。唯一のこった公孫瓚は、すごい存在感。

純乃棄妻子，逃入鮮卑，為其客**王政**所殺，送首詣虞。封政為列侯。

虞以功即拜**太尉**，封襄賁侯。

劉虞は、太尉を辞退。かわりに、劉焉たちを推す。董卓は劉虞を、大司馬とする。

○英雄記曰… 虞讓太尉，因薦衛尉趙謨、益州牧**劉焉**、豫州牧**黃琬**、南陽太守**羊續**，

並任為**公**。會董卓至洛陽，遷虞**大司馬**，瓚**奮武將軍**，封薊侯。

公孫瓚は、方針の違う上司・劉虞が煙たい。公孫瓚が、活躍する道が閉ざされた。

■3節 袁紹が劉虞に迫る史料は、呉人の創作

關東義兵起，卓遂劫帝西遷，徼虞為**太傅**，道路隔塞，信命不得至。

劉虞は、董卓の誘いを断っていない。董卓の使者が、幽州に来れなかった。使者のせいだ。

袁紹、韓馥議，以為少帝制於奸臣，天下無所歸心。虞，宗室知名，民之望也，

遂推虞為帝。遣使詣虞，虞終不肯受。紹等複勸虞**領尚書事**，承制封拜。

虞又不聽，然猶與紹等連和。

劉虞が皇帝を断ると、袁紹はすぐ「じゃあ、政治を担当してね」と依頼した。帝位を勧めることに、固執しない。

ぼくは思う。劉虞を皇帝にしたいのは袁隗で、袁紹でない。だから袁紹の要求は、ゆるい。

劉虞は皇帝を断るが、袁紹と劉虞の関係はくずれない。袁紹が、本気で勧めないからだろう。

○九州春秋曰…**紹**、**馥**使 故樂浪太守**甘陵張岐** 齎議詣虞，使即尊號。

張岐のふるさとは、甘陵。劉虞が、国相をした地域だ。劉虞は「献帝がいるじゃん」と、怒る。

虞厲聲呵岐曰…「卿敢出此言乎！忠孝之道，既不能濟。孤受國恩，天下擾亂，未能竭命 以除國恥，望諸州郡 烈義之士 戮力**西面**，援迎幼主，而乃 妄造逆謀，欲塗汙**忠臣**邪！」

○吳書曰…馥以書 與**袁術**，**雲帝非孝靈子**，欲依**絳**、**灌**誅廢少主，迎立代王故事。稱虞 功德治行，華夏少二，當今 公室枝屬，皆莫能及。

韓馥は、袁術に言った。前漢初、呂太后のとき、2人の皇帝が廃された故事。

又雲…「昔光武去 定王五世，以大司馬 領河北，耿弇、馮異 勸即尊號，卒代**更始**。今劉公 自**恭王枝別**，其數亦五，以大司馬 領幽州牧，此其與**光武**同。」

後漢末に登場すべき、新しい皇帝は、光武帝になぞらえられる。袁紹や袁術が、意識したとおり。

是時有四星 會於箕尾，**馥**稱讖雲 神人將在**燕分**。又言 濟陰ノ男子ノ王定 得玉印，文曰「**虞**為天子」。又見兩日出 於**代郡**，謂虞 當代立。紹又別書**報術**。

出典は『吳書』だ。袁術の悪しき野心をあぶりだすため、これを書いている。袁紹の意図は、関係ない。

光武帝は、こういう「迷信」によって即位した。『吳書』は、文例を参考にしたらしい。

是時術 陰有**不臣之心**，不利 國家有長主，外託公義以答拒之。

紹亦使人 私報虞，虞以國有**正統**，非人臣 所宜言，固辭不許。

乃欲圖 奔**匈奴**以自絶，紹等乃止。虞於是 奉職脩貢，愈益恭肅。

コミカルな逸話「袁紹がシツコイから、劉虞は匈奴に逃げる」も、『吳書』が袁術を責めるための創作。

諸外國羌、胡有所貢獻，道路不通，皆為傳送，致之京師。

■4節 献帝の長安脱出を妨げ、公孫瓚が、袁術を抱き込む

虞子和 為侍中，在**長安**。天子 思**東歸**，使和 偽逃卓，

潛出 武關詣**虞**，令將 兵來迎。和道 經**袁術**，為説 天子意。

劉和が袁術に説明したのは「献帝は、劉虞が助けられ、洛陽に帰りたい」だ。ちくま訳、分かりにくい。

術利レ虞 為援，留和不遣，許兵 至俱西，令和 為書與虞。

虞得和書，乃遣數千騎詣和。

●ちくま訳…袁術は劉虞を利用し、劉虞に袁術を援助させるつもりで。

●ぼくの解釈…袁術は劉虞に利益を与え、袁術が劉虞の助けとなるつもりで。

つまり袁術は、劉虞と一緒に、献帝を助けようとした。

袁術が味方してくれるのだから、劉虞は気持ちよく、1000騎を出したのだ。

(ちくま訳の意味なら、袁術は、劉虞&劉和を、どのように利用しようとしたのか?)

のちに袁術は、皇帝を名乗る。そのとき献帝は邪魔になる。これは事実。だがこの時点では、史料に「袁術は、劉虞を手伝って」と書いてある。袁術の意図を、勝手に曲げてはいけない。

瓚知 術有異志，不欲遣兵，止虞，虞不可。

公孫瓚から見た袁術の「異志」とは、何か。公孫瓚にとって、気に食わないことだ。

公孫瓚が気に食わないのは、劉虞だ。胡族政策で、劉虞と対立した。

つまり公孫瓚は、袁術が劉虞を援助し、献帝を助けるのが、気に食わないのだ。

異志とは「袁術が帝位を狙う」ではない。まだ公表(もしくは決意)されていない。公孫瓚が、知るわけがない。ちくま訳を、裴注をまげて頭から読むと、さっきの『呉書』にも引きずられて、間違える。

瓚懼 術聞而怨之，亦遣其從弟越，將千騎詣術以自結，而陰教術執和，奪其兵。

●ちくま訳…公孫瓚は、公孫越を送って袁術と結ぶ一方、

公孫瓚はひそかに公孫越が、劉和の軍を奪い取るように、策動した。

●ぼくの解釈…公孫瓚は、公孫越を送って袁術と結ぶ一方、

(劉虞と結ぶという、もとの袁術の方針とは違うけれども) ※「而」は逆接

公孫瓚はひそかに袁術が、劉和の軍を奪い取るように、袁術に教えた。

由是虞、瓚益有隙。和逃術來北，復為紹所留。

袁術は公孫瓚にそそのかされ、劉虞&献帝と対立した。後戻り不可。袁術が「後漢の忠臣」を辞めた原因か?

袁術と公孫瓚は、遠交近攻の原則により、同盟する。これは有名。

だが劉虞についての政策で、公孫瓚と袁術は、はじめ対立した。袁術は、袁隗に従い、劉虞を支援していた。公孫瓚と袁術の同盟が成立するには、袁術の方針転換が必要となる。まさに今だ。

ちくまの「誤訳」で分かりにくくなっていたが。歴史的瞬間を、見つけてしまったよ。

■5節 公孫瓚が、袁紹に逆転負け

是時、術遣孫堅、屯陽城拒卓、紹使周昂奪其處。

袁術は孫堅を、豫州刺史にした。周昂は、豫州を攻めた。

術遣越與堅、攻昂、不勝、越為流矢所中死。瓚怒曰：「余弟死、禍起於紹。」

「私の弟を殺したのは、袁紹だ！」

遂出軍、屯磐河、將以報紹。紹懼、以所佩勃海太守印綬、授瓚從弟範、遣之郡、

欲以結援。範遂以勃海兵助瓚、破青、徐黃巾、兵益盛、進軍界橋。

袁紹の唯一のよりどころ、渤海太守の地位を、公孫氏にあげた。公孫瓚の怖さ、袁紹の不安定さが分かる。

○典略載瓚表 紹罪状曰：

公孫瓚が、袁紹の罪を、書いている。董卓を招き、献帝を捨て、叔父を見殺しにし、領土を広げ。どれも正解。

「昔為司隸校尉、會值國家喪禍之際、太后承攝、何氏輔政、

紹專為邪媚、不能舉直、至令丁原、焚燒孟津、招來董卓、造為亂根、紹罪一也。

袁紹伝で判明したが、董卓を呼ぶよう、何進に勧めたのが袁紹だ。

卓既入雒而主見質、紹不能權譎、以濟君父、而棄置節傳、迸竄逃亡、忝辱爵命、背上不忠、紹罪二也。

紹為勃海太守、默選戎馬、當攻董卓、不告父兄、至使太傅門戶、太僕母子、一旦而斃、不仁不孝、紹罪三也。

紹既興兵、涉曆二年、不恤國難、廣自封殖、乃多以資糧、專為不急、割剝富室、收考責錢、百姓籲嗟、莫不痛怨、紹罪四也。

韓馥之迫、竊其虛位、矯命詔恩、刻金印玉璽、每下文書、卓囊施檢、文曰

『詔書一封、口鄉侯印』。昔新室之亂、漸以即真、今紹所施、擬而方之、紹罪五也。

公孫瓚は、袁紹が王莽のマネ（皇位をうばう）を狙っているという。劉虞の推戴でなく。

紹令崔巨業、候視星日、財貨賂遺、與共飲食、克期會合、攻鈔郡縣、此豈大臣所當宜為？紹罪六也。

紹與故虎牙都尉劉勳首共造兵，勳仍有效，又降伏張楊，而以小忿枉害于勳，信用讒慝，殺害有功，紹罪七也。

紹又上故上谷太守高焉、故甘陵相姚貢，橫責其錢，錢不備畢，二人並命，紹罪八也。

春秋之義，子以母貴。紹母親為婢使，紹實微賤，不可以為人後，以義不宜，乃據豐隆之重任，忝汗王爵，損辱袁宗，紹罪九也。

袁紹の母は卑しい。袁紹は、袁氏をおとしめていると。まるで袁氏の一門になったような咎めかただ。

又長沙太守孫堅，前領豫州刺史，驅走董卓，掃除陵廟，其功莫大。

紹令周昂盜居其位，斷絕堅糧，令不得入，使卓不被誅，紹罪十也。

臣又每得後將軍袁術書，云紹非術類也。紹之罪戾，雖南山之竹不能載。」

袁術は「袁紹は親戚ではない」と言った。袁紹は、公孫瓚に勝てなかった。

遂舉兵與紹對戰，紹不勝。

以嚴綱為冀州，田楷為青州，單經為兗州，置諸郡縣。

紹軍廣川，令將麴義先登與瓚戰，生禽綱。瓚軍敗走勃海，與範俱還薊，

於大城東南築小城，與虞相近，稍相恨望。

公孫瓚が、袁紹に敗れた。逃げて、劉虞の近くに引越した。公孫瓚と劉虞は、さらに対立。バカだねえ。

■ 6節 劉虞を殺す

虞懼瓚為變，遂舉兵襲瓚。虞為瓚所敗，出奔居庸。瓚攻拔居庸，

生獲虞，執虞還薊。會卓死，天子遣使者段訓增虞邑，督六州。

董卓が死んだのは、いま！このメモは、あとから史料を探すとき、絶対に役立つだろう。笑

瓚遷前將軍，封易侯。瓚誣虞欲稱尊號，脅訓斬虞。

○魏氏春秋曰…初，劉虞和輯戎狄，瓚以胡夷難禦，當因不賓而討之，今加財賞，

必益輕漢，效一時之名，非久長深慮。故虞所賞賜，瓚輒鈔奪。虞數請會，稱疾不往。

以下、劉虞の最期です。

至是戰敗，虞欲討之，告東曹掾右北平人魏攸。攸曰：「今天下引領，以公為歸，謀臣爪牙，不可無也。瓚，文武才力足恃，雖有小惡，固宜容忍。」乃止。

後一年，攸病死。虞又與官屬議，密令衆襲瓚。瓚部曲放散在外，自懼敗，掘東城門欲走。虞兵無部伍，不習戰，又愛民屋，敕令勿燒。故瓚得放火，

因以精銳衝突。虞衆大潰，奔居庸城。瓚攻及家屬以還，殺害州府，衣冠善士殆盡。

○典略曰：瓚曝虞于市而祝曰：「若應為天子者，天當降雨救之。」時盛暑，竟日不雨，遂殺虞。

○英雄記曰：虞之見殺，故常山相孫瑾、掾張逸、張瓚等忠義憤發，相與就虞，罵瓚極口，然後同死。

瓚上訓為幽州刺史。瓚遂驕矜，記過忘善，多所賊害。

○英雄記曰：瓚統内外，衣冠子弟有材秀者，必抑使困在窮苦之地。或問其故，

答曰：「今取衣冠家子弟及善士富貴之，皆自以為職當得之，不謝人善也。」

公孫瓚は、名士を圧迫した。だから失敗した。そう言われる根拠だ。

所寵遇驕恣者，類多庸兒，若故卜數師劉緯台、販繪李移子、賈人樂何當等三人，與之定**兄弟之誓**，自號為伯，謂三人者為仲叔季，富皆巨億，或取其女以配己子，常稱古者**曲周**、**灌嬰**之屬以譬也。

劉備たち義兄弟のような関係の例として、よく引かれる史料だ。

■ 7 節 袁紹が公孫瓚を滅ぼす

建安四年，紹悉軍圍瓚。

以後、省略。袁術とのからみが薄まるから。劉虞の旧臣と袁紹が連合し、199年に公孫瓚を滅ぼします。

劉虞と袁紹は、ずっと友好関係にあったようだ。公孫瓚という、共通の敵がいたのも、手伝った。

つまり袁紹は、その気になれば、いつでも劉虞に「皇帝になれ」と催促できた。しなかった。これを確認した。